

夜の果てに(3)

フリード・ランペ著
松川 弘*・訳

(平成24年9月27日受付)

Am Rande der Nacht (3)

von
Friedo Rampe

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 27, 2012)

オスカルがたずねた。「今までどこにいたんだい？」アントーンは彼にすべてを物語った。彼らは埠頭を歩いていった。

「あの船長はサディストだ」と、オスカルが言った。

アントーンは悲しげに言った。「僕はむしろ、彼にいじめられるのをバウアーが望んでいるんじゃないかと思うんだ。」

「そんなこと想像もできないよ。」

「彼がそのことでひどく悩んでいるのは確かだよ。でも、それが彼を楽しませているんだ。これは恐ろしいことだよ。犬が死んだとき、僕は彼にいますぐ出ていくべきだって言ったんだ。彼も出ていかなければとやってた。しかし、彼が実際に出ていったと思うかい？」

「分からない。もうそのことは話題にしないでくれよ。」

彼らは港の出口に近づいた。すでに町の喧騒が聞こえてきた。空には、うすい灰色の霧の背後に、黒いぶ厚い雲に取り囲まれて、月がにぶく輝いていた。月の光は、灰色の倉庫のまわりや岸壁、貯水槽に、船のマストやロープ、煙突の上に降り注いだ。また、きらきら光るほとんど動きのない水面を力なく滑っていった。バルタとカールが今日乗ってきた白い遊覧船が人気もなく横たわっていた。彼らがその船のそばを通り過ぎたとき、航海士が船橋に姿をあらわし、上陸した。彼はアストリア館へ行くつもりだった。確固たる足取りで彼は船橋を歩いていった。板が彼のかかとの下で乾いた響きを立てた。

アストリア館に行くことを決心するまで、二人の若者はしばらくの間、港の辺りをなおもうろついていた。彼らは港通りに沿ってぶらぶら歩き、税関や酒場のそばを通り過ぎた。多くの男や娘たちがあちこち行き交っていた。彼らは土手のところまで行って、濠と製粉所、鉄道橋を見た。築堤の上を列車が通過し、その明かりが濠の水面に流れた。ソーセージの屋台のそばを通り過ぎたとき、アントーンは気分が悪くなった。彼はあの犬のことを思い出したようだ。犬の死骸は港の水中でゆっくりふやけ、膨れ上がっていくだろう。あの白い毛皮に月の光が当たって鈍く光る。彼らは、濠を取り囲む手すりにもたれて、しばらく黙って水面を見つめていた。白鳥が小屋の前で頭を羽根の中に突っ込んで眠っていた。ぼろぼろの古い小舟が一隻、岸の杭につながれていた。灰色の月の光を浴びて、製粉所が、こうもりが羽根を伸ばしたように森の中から黒々とそびえ立っていた。

アントーンは、急にひとり笑いだした。「君は、あれからまだ彼とカルヴァンのことについて語り合っていたのか？」

「そのことは口にしないでくれよ」と、オスカルは言った。「また通りへ戻ろう。」彼らは港通りに戻って行った。ずっと前から、アストリア館の光り輝く正面と色とりどりのポスターが彼らの目を惹いていた。彼らはまたその建物の前で立ち止った。

アントーンが尋ねた。「中に入って見ないか？」

「ちょっとした馬鹿騒ぎだぜ」と、オスカルが言った。

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

「きっとおもしろいよ」と、アントーンが言った。「ちょうど来合わせたことだし…」

呼び込みが彼らに向かって腕を伸ばした。「どうです、お客さんたち、いらっしやい。本日のメインイベント、今晚の目玉がこれから始まりますよ。ディークマンとアルバロスの試合ですよ。」呼び込みは窓口に行って窓ガラスをたたいた。「おねえさん、殿方二名だよ。」カーテンが上がって、窓が開いた。係の女性が二人の若者をもの憂げに冷たく見つめた。彼女の念入りにウェーブのかかった髪は、毒々しい黄色に輝いて見えた。彼女の前には貨幣の小山ができていた。彼女は売り上げを計算していたのだ。

「仕方がないね」と、オスカルが言った。

彼らが入口のアーチをくぐると、甘美なゆっくりした拍子のダンス音楽がかすかに聞こえてきた。そして、彼らがフロアに入ると、貝殻を模したアーチ形の舞台の上でペアのダンサーが踊っているのが見えた。それはニータとフレッドだった。ニータの銀色のコスチュームがきらきら光っていた。フレッドは黒い燕尾服を身に着け、シルクハットをかぶっていた。オスカルとアントーンは、ここで誰もがするようなことをした。木々の下のテーブルに着席して、ビールを一杯注文したのである。アントーンはまだまともではなかった。彼は相変らずパウアーのことを考えていた。パウアーは、前は親しみのもてる顔つきをしていた。今はどうだろう？

人々は木々の下に腰を落ち着け、音楽が演奏されていた。木々の葉はほとんど動かず、ジャズバンドがあずまやにすわって、多くの人が煙草をふかしていた。その煙はゆっくり木々の梢にまでたちのぼり、そこで二つに分かれた。金髪の娘は並の容顔で、生意気そうな鼻と目をしていて。だが、彼女はとても可愛らしく見え、彼女の着衣はきらきら光っていた。彼女のパートナーは狭い蒼白な額の上にシルクハットを斜めにかぶり、手足を拍子に合わせて動かしながら観客たちを凝視していた。

オスカルやアントーンの席から程遠からぬところに、カールとベルタが着席していた。カールは、ジャガイモのサラダが添えられた小ぶりのソーセージをぱくつき、せつせと飲み下していた。ベルタは頬杖をつきながら落ち着き払って舞台の方を見ていた。

「この手の舞台はもう何百回となく見たわ」と、彼女は言った。それから彼女は航海士の方に目をやった。彼はまともに彼女を直視し、それどころか椅子の上で少し彼女の方に向きなおると、彼女に目くばせした。本当に恥知らずな男だ、もう我慢できない！ベルタは舞台に目をやった。自分が難なく彼女をものにできたことを、あの男は大したことだと思ってもいない。彼女はまだ不満だった。フ

レッドはニータのうしろに回ると、彼女の手を取った。彼らは前後に並んで立つと、足を上げたり、横に身をかがめたり、前後左右に動いたり、きわめて精確に同じ動作をした。

「奴は君のことを気にしてるぜ」と、フレッドは顔の表情を変えずにささやいた。彼の目は冷たく観客たちを見つめていた。

ニータはかすかに笑った。そして、嘲るように口をとがらせた。「うまく事が運んでるんだから、まあいいわ。」「僕には君とだけ踊る義務があるってことを考えてくれよ。君は見捨てられるぜ。」

「何をするつもりなの？」

「また奇術師にもどろうかと思ってね。」

「フレディ、うるさいわね。静かにしてよ。みんな見てるわよ…」

「真っ平だ。もうやる気が失せちゃった…」

長い和音で演奏が終った。ニータとフレッドは、しばらくむずかしい姿勢で静止していた。それから彼らは軽やかな足取りで踊るように退場し、小さなドアを通過していった。喝采はほどほどだった。人々はかすかに手を動かした。彼らは、より素晴らしい出し物の前の余興として、このへたくそな踊りを我慢することができたようだ。ニータとフレッドは、ふたたび踊るように登場し、硬直した微笑みを浮かべながらおおげさに腰をかがめて会釈した。彼らはもう一度あらわれたが、拍手する者は誰もなかった。大したこともやっていないくせにそんな芝居がかった真似はやめろとでも言いたげに、彼らは腕を広げていた。

「あきれたことだ」アントーンは思った。

バンドが大きく鋭いリズムで演奏を再開した。今やみんなが踊り出そうとしていた。まず、ひとりの水夫が娘を連れて高いダンスフロアに上がった。彼は木の床の上で大きくやわらかく体を左右に揺り動かした。彼の幅広のズボンがぶらぶら揺れていた。客たちの面前で、娘はおどおどしながら微笑んでいた。彼女は先頭に立って踊りたくはなかったのだ。もう誰も上がってはこないのだろうか？人々は下で静かに着席していた。今や彼らはこの広いフロアで二人きりで踊り、みんながそれを眺めていた。人々は木陰にゆったり腰を下ろしていた。灯火はおだやかに緑のなかに射し込んだが、木の葉はそよとも動かなかった。まるですべての人々が一瞬、夢見心地になり、眠り込んだように思われた…タバコの煙がまっすぐに立ち昇り、枝葉のまわりで渦巻き、夜の中に消えていった。そのとき、生暖かい風が吹いてきて梢をかき乱し、人々を撫で、色鮮やかなテーブル掛けに当たってそれをかすかに揺すった。そのとき、人々のあいだでまた少し動きがあった。そこかしこで人々が立ち上がり、互いに会釈し合って、似合いの相手を

探し求めた。カップルが成立すると、彼らは木の小さな階段を駆け登って、ダンスフロアに上がった。次第に多くの人々が押し寄せ、入り乱れて押し合った。二人の黒人がそれぞれ娘連れで上がってきて、密集する人々をかき分けながら踊り出した。

「おかしいね、ここでレスリングがあるんだろう。これはヴァリエテとダンスじゃないか」と、アントーンが言った。同じテーブルに、帽子をあみだにかぶった肥った男がひとり、両手を組み合わせてすわっていた。彼は葉巻を口にくわえ満足そうにくつろいでいた。彼のかたわらには、ビールのグラスとプログラムが置かれていた。アントーンが「すみません、レスリングの試合はないんでしょうか？」とたずねたとき、彼はまったく上の空だった。アントーンはもう一度たずねた。すると彼は気がついた。彼は遠くのもの眺めるような眼差しをしていた。重く緩慢な夢見心地の潮が立ち昇るように、彼は少し身を起こした。「何ですって？ ああ、レスリングの試合のことですか。それはダンスの合間にあるんですよ。それからまたダンスになります。舞台の上での出し物もあります。それらが入り乱れて行なわれるんですが、もちろん、レスリングの試合がメインです。」彼の太い指がプログラムの上に置かれた。「ちょっとご覧なさい。どこだったかな？ ここだ、ここだ。ニータとフレッド。ダンスのペア。これは今し方終わりました。それからダンス。上でみんなが踊ってるでしょう…その次が千里眼の神童。これは何だったかな？ とにかく子供です。それから、これがすごい。」彼は体を直し、きちんとすわりなおして、帽子をうしろの方に押しやった。「いよいよディークマンとアルバロスの登場です。二人とも素晴らしい最高のレスラーです。彼らのために私はここに來てるんですから。でも、ほかの出し物も素晴らしい。今夜はすべてが最高です。それにこの空気、この暖かい九月の晩。時がたつのは早く、もうすぐ十月になれば、すべてが終りになります。でも私たちは今ここにすわってるわけですから、まずは大いに楽しみ、飲み、観覧しようじゃありませんか。」彼はグラスからビールをぐいと一飲みして、またうしろに寄りかかり、重く緩慢な夢見心地の潮のなかに姿を消し、暗い淀みにゆっくり沈んでいった。

アントーンは、大口の河神が喉をごろごろ鳴らしながら浮かび上がり、泥水を吐き出してふたたび沈んでいったような感じを受けた。「ありがとう。その二人のレスラーのことは、さっき呼び込みから聞きましたよ。」「アルバロスについても、同じようなことを彼は言っていました」と、オスカルが付け加えた。

その間に、航海士はさっさとベルタのテーブルに歩み寄り、会釈した。ベルタは、彼女の夫の方を見た。航海士は

カールの方を向いて言った。「あの、よろしいでしょうか？」

「どうぞ、どうぞ…」と、カールは言った。

ベルタは「私、踊りたくないわ」と言った。

カールが言った。「しらばくれずに、本心を言ったらどうだ。家内は——これは私の家内なんです。ハハハ、そんなことは別に関係ありませんが——ダンスがものすごく好きなんです。ところが私は大嫌いときてる。彼女をお連れ下さって構いませんよ。」

ベルタは、ためらいながら立ち上がった。「あなたがそう言うのなら…でも、今晚は本当に気が進まないのよ。」カールは、不機嫌そうに頭を揺すった。一応礼儀にはかかっていった。

フォックストロットが終って、踊り手たちが離れ、一瞬、相手が決まらないまま立っていた。バンドマスターがピットの入り口に歩み入り、疲れた目でバンドの面々をじっと見つめた。ピットの内側の演奏者たちの無気力で投げやりな顔の表情が、かすかにうかがえた。茶色や黒の大きなコントラバス、グランドピアノの黒光りする蓋が見えた。

演奏者たちはみんな、バンドマスターの方に頭を垂れた。それから、彼らは拍手した。バンドマスターは振り向いて、晴雨計の人形のように引込んだ。いつも、この繰り返した。今晚も、明日も、明後日も。いつか自分は急へどを吐くに違いない、とバンドマスターは思った。

だが、響き始めた音楽に、人々は耳を傾けてはいなかった。それは明るく魅力的な、ねっとりしたあたたかいワルツだった。人々はゆっくり踊り始めた。

勝利を確信した航海士は、ベルタをきつく抱き締めた。「僕は君をふたたびものにしたわけだ。」しばらくの間、頭をあおむけに反らせたベルタは、彼の力強い腕、幅広い胸、がっしりした太い首、上唇のちくちくする短い髭の感触をを楽しんだ。ところが、それから彼女は急にそっけなく言った。「あなたは厚かましいわ。私の身にもなってよ。何でもあなたの思い通りになるわけじゃないでしょう。」

「何てまぬけな奴なんだろう。」

「彼はとてもデリケートなの。彼に構わないでよ。あの人はあなたと違って恥を知ってるわ。」

「それじゃ、今晚はもうだめかい？」

「当たり前でしょ」と、彼女は言った。

ひとりの娘が航海士に笑いかけた。「今晚は、カーリー。」

「あの娘、あなたに笑いかけたけど、知り合いなのね。」

航海士は娘を無視した。「知るわけないだろう。人違いさ。」

「顔見知りには違いないわ。私にも想像がつくもの。」

彼らのそばで、ひとりの黒人が踊っていた。彼の黒光り

する顔がベルタのすぐ前に来た。彼は彼女を見つめた。彼はにやにやしなながら分厚い唇をむき出しにした。力強い歯と目が輝いていた。ベルタは、彼の顔、その厚ぼったい口許、潤んだような目を凝視した。

「ニグロか、あれが君にはおあつらえ向きってわけか？」と、航海士が言った。

ベルタは彼をじっと見た。「そんなところね。」彼女は吐き出すように言った。

この瞬間、ジョニーは腕時計を見ていた。彼はそれを毛の生えた腕の刺青の上にはめていた。時間が来た。彼は、ビールを飲み干すと、煙草を吹かしながらテーブルの間を歩いていった。ベランダが舞台につながっていた。ジョニーはベランダに通じるドアを通り抜けた。彼は狭い中庭に出た。庭の真ん中に葉の茂った大きなニレの木が生えていた。舞台のうしろの壁で一方が仕切られており、小さな階段が上の舞台に通じていた。もう一方には、芸人たちが使う軒の低い木造バラックが建っていた。隅の方には小道具や球、箱やブランコが置かれており、壁には、シュトルツェンフェルス城あたりのライン川の風景、宮殿の部屋、東洋風の柱をめぐるせた広間といった書き割りがいくつか立てかけてあった。

ニレの木の下ベンチには、司会者が腰を下ろしていた。ふだんは鋭く緊張した彼の顔も、今は陰気にたんでいた。彼は、浮かぬ顔でライン川の風景の書き割りをのぞき込んでいた。隅の方で、小さな子供がダックスフントと遊んでいた。白いセーラー服を着たその子供は、明るい声で優しくその犬を叱っていた。

ジョニーは言った。「ディークマンに発破を掛けたいんだ。彼は時間を持てあましてるんだろう。」「あの子の出番が終わるまではだめだよ。」

「彼も無精になってね」と、司会者が言った。「あの脂肪のたるみを取るように、早く手を打たないと。」

「毎日マッサージはしてるんだけど、なにしろ彼がいつも食べ過ぎるものでね…」

「彼は一体何歳なんだい？」

「三五歳だ。」

「もうそんな歳になるのか。ところで、家内が病気だって手紙が来たんだ。腎炎だそうだ。帰ってやりたいんだけど。」

「なんてこった。」ジョニーはそう言うと、きまり悪そうに鼻を鳴らした。彼は脇を向いた。「あの小僧は一体何なんだ？」

「催眠術師の息子さ。神童でね。新しい出し物なんだ。もうすぐ彼の出番になる。」

ジョニーは頭を振った。「いまましいガキだ。」

「やつはこの子をこき使ってるんだよ。」司会者が言っ

た。「よく似た例を知ってるが、すぐ死んでしまうぜ。」

「道具がここで野ざらしにしてあるなんて思いもしなかった。」ジョニーは、書き割りを指し示した。「天気がいいときはこれでもいいが、雨のときは…」

「雨でも平気だよ。もうかなりいかれてるからね。よく見ると、雨にぬれて傷んだ箇所や縞がはっきり分かる。でも、遠くから見ると、まだまだ立派なもんだ。客はそんなにまじまじ見るわけじゃないから、これで十分なんだ。ええと、何の話だったっけ？ そうそう、家内が一人きりで入院しているんだ。そう妹の手紙にあった…」

「すまないが、もうハインのところへ行かなくちゃ。ぐずぐずしてはいられないんだ。」ジョニーは先に進もうとした。彼は、子供のそばに立つと、かがみ込んで犬の小さな胴を手のひらでピシャピシャたたいた。「言うことをきかないのかい？」

子供は青白い顔を上げて、青い目でおどおどしながら彼を見つめた。「こいつはちんちんする気がないんだ。」

「ピシッと一発お見舞いすればいいんだよ。」ジョニーは気楽に笑って立ち去った。ダンスが終わった。航海士とベルタは伸直りしていた。彼は木曜が休みなので、彼女は午後彼のところへ行くつもりだった。だが、厚かましくするのは禁物である。礼儀正しさが前提なのだ。それは当然のことで、彼は区別をつける術を心得ていた。彼女はここらの娘たちとは何かまったく違う女性だった。あの哀れなカールは八時まで事務所にいた。だから、逢い引きは至極容易である。今晚はこれで終わりにしよう。それは仕方がない。彼女の言うとおりにした方がよさそうだ。ここでごり押しするのはまずい。それじゃあ、木曜にまた。港通り五四番地だ。忘れちゃだめだよ。「離してよ。彼がこっちを見てるわ。」

ベルタが席に戻ったとき、カールはたずねた。「あの男は知り合いなのか？ いやに親しげに話し合ってたじゃないか…」

「あれは蒸気船の航海士よ——今日の午後、彼と踊ったことがあるのよ。かなりお馬鹿さんだけどね。」

「でも、お前さん、変な目つきでやつを眺めてたぜ。」

「妙な勘ぐりはよしてよ。それで、今度の出し物は？」

「神童だとさ。」

司会者は、もう一度少年を膝の上に乗せた。少年は彼に自分の息子のことを思い出させた。息子は今、母親のいない家に一人きりでいるだろう。夜行を使えば、夜遅く家に着いて明日の夕方には戻って来れるだろう。

「あの人は、こいつをしたたかにぶつたら言うことを聞くとってた。でも、そんなことできないよ。」小さな茶色のダックスフントは彼らの前にすわり、首をかしげて、ずる

がしこそうな目つきで自分の主人を見つめていた。

「どうしてこいつが全部覚え込まなきゃならないんだね、アッディ。そんな必要はなかるうよ。お前さんの遊び相手をしてりゃいいんだ。」

「僕だってこいつと遊んでいたいよ。でも、こいつは覚えなけりゃいけないんだ。犬はすてきな芸当ができる。こいつは前足で歩いたり、輪くぐりしたり、テーブルについたり、人間のようにちゃんと食事できなきゃいけないんだ。これからこいつに服を着せてやるよ。」

「でも、なぜそうなんだい、アッディ。そんなにこいつを苦しめるなよ。その方が、君だって楽じゃないか。」

「いいや、こいつは覚えなけりゃいけない。僕もそうしてほしいんだ。それもすぐにね。僕たちにはそんなに時間の余裕がないんだから。」司会者は、この小さな友人の悲しげな顔を不安げに見つめた。その顔は本当にやつれているように見えた。

「どうしたんだい？ 一体何があったんだ？」

アッディは司会者の首っ玉に抱きつくと、彼の耳許でそっとささやいた。「パパに言わないって約束してくれる？」

「いいよ。どうしたの？」

「こいつをきちんと仕込んだら、僕はパパを捨てて、こっそり出ていくんだ。そしてこのフィップスと一緒に公演して、自分でたくさん金をかせぐんだ。それから…」

そのとき、父親が彼らの前に姿をあらわした。「アッディ、時間だよ。用意しなさい。」

アッディは司会者の膝からすばやく滑りおりた。

アッディの様子を点検しながら、このがっしりした頬の赤い男は言った。「髪にブラシをかけるんだ。ブラウスはきれいか？ だめだな。出番の前にセーラー服のままで砂遊びするなっていつも言ってるじゃないか。」

「フィップスと遊んでただけだよ。」

「いつもあの汚らしい駄犬だ。やつを手離そう。汚いことはもうよすんだ。」彼は、司会者の方に向き直った。「確かに母親はいないが、ここではおれが父親と母親を兼ねなきゃならん。ほら、手を見せるんだ。」「汚い。すぐ洗ってくるんだ。こんなことも自分でできないのか？」アッディは、バラックに走っていった。父親がうしろから叫んだ。「すぐに戻ってくるんだぞ。」

「子供とある演目をやるのは、至難の技なんだ。大人は当てることになるが、子供は気まぐれだ。あんたはおれが厳しすぎると思ってるんだろうが、訓練と厳しいしつけだけが役に立つんだ。」

司会者は小声で言った。「あんなに小さな子供は、舞台上に立たせるべきじゃないよ。」

「馬鹿だな。小さな子供が、一番効果的なんだ。女たちは

感激屋だからな。」

「でも、あんたが子供とやってることはあまりに危険すぎる。」

「慎重に、回数を限ってやれば問題ないさ。」

「あんたはここでは二週間毎晩それをしてるじゃないか。」

「ああ、ここは例外さ。でも、また休みがとれるからね。」

アッディが戻ってきた。ベルが鳴り出し、司会者は、兩人を紹介するために暗い表情で木の階段をのぼって舞台に出ていった。ドアを開けて照明の下に歩み出たとき、彼の姿や顔つきは引き締まり、彼はにこやかにほほえんで手をこすり合わせた。「皆さま、次に御覧に入れますのは、思いもかけず感動的な父と息子のやりとり…」

「お前さん、酔っ払ってるな。」ジョニーは叫ぶと、ハイン・ディークマンのすぐそばまで歩み寄った。ブランデーの匂いがした。「馬鹿なやつだ。もうすぐ出番じゃないか？」ハインは、寝椅子の上に横たわっていた。ジョニーは明かりをつけると、彼を揺すり起こした。困ったことに彼は酔いつぶれていた。ハインはよろよろ立ち上がると、白痴のように何事かブツブツつぶやきながらジョニーの前に出た。ジョニーは彼のバスローブを脱がせた。ハインは、自分の気が確かであることを示そうとした。

「カッセルこのかた取まっていたのに。あのときはしたたかにお前さんをぶちのめしてやったが、また性懲りもなくおっぼじめやがったな、この豚野郎！」ジョニーは我を忘れ、今にも泣き出しそうだった。「すべてを台なしにするつもりなのか。」

「あんたの言う通りだよ。」呂律の回らぬ舌でハイン・ディークマンはこう言うと、度を失った自棄的な顔を開いた窓に向け、壁の前の茂みに目をやった。「でも、そんなに怒るなよ。大したことじゃないさ。このでぶの老いぼれに何ができると言うんだ。」ハインはうめくように言うと、自分の腹のたるみをつまんだ。「この腹ももとは堅くて強靱で艶があったがね、ジョニー。」

「またもと通りになる。」ジョニーは陰気な声で言うと、ハインを探るような目つきで見つめた。「気を取り直すんだ。きちんとトレーニングを積んで、食べ物に気をつけることだ。僕の言うことを聞けば、うまくいくんだ。分かったかい。」

「いいや、もうだめだ。」ハインは嘆息すると、まっすぐ窓辺に歩み寄ろうとしたが、少しよろめいた。「もうだめなんだ。」彼は窓の外の何もない壁を見つめた。「今はまだいいが、もうすぐだめになる。ドシンと倒れてのびてしまえば、やつらは叫び、口笛を鳴らすだろう。それも自分には聞こえなくなる。やつがそこにすくと立ち、やつらは歓呼しながら拍手する。やつは笑い、おれはリングの床に横

たわっている。そんなことは御免だ。」

「誰が立つんだ?」「あんたが今話題にしているやつさ。」ジョニーは両腕を腰に当てて、ハインの幅広い肉づきのいい背中をぼんやり見ていた。ハインはまた振り返った。彼は、変な格好で身をかがめ、自分の顔をジョニーの顔のすぐそばに近づけた。

「おれはやつを知っている。」ハインはささやいた。「やつはとても若くて、おまけにすごい美男子だ。」

「ちくしょう、一体誰のことなんだ。」

ハインはうめいた。「あのアルバロスのことさ。それとも違う名前だったかな。」

「またその話か。」ジョニーは毒づいた。「胸くそが悪い。その話はいいかげん聞きあきたよ。」

「どうせおれは人間のくずだよ。」

「しっかりするんだ。繰り返はやめろよ。それに何という顔なんだ? 間抜けづらをするな。体を動かして、少しはトレーニングしろ。来い。頭を水のなかに突っ込んでやるから。」

ジョニーは彼を小さな洗面台のところまで引っ張っていき、洗面器に水を注ぐと、ハインの頭を深々と水につけ、それをこすり、もう一度水を彼の丸い頭の上に注いだ。

ハインはまた頭を上げた。彼のぬれた顔は輝き、黄色い髪が額に張りついていた。「あの感じのいい男とは闘いたくない。やつはおれの友達だ。友達と闘う気はない。」

「そうくるだろうと思ってたよ。」ジョニーはがっかりして彼を見つめた。「あんたは多分また彼のところに行って、今日はおてやわらかに頼むと彼に言うんだろうが。すべてお見通しさ。あんたはこの好機を見逃すつもりなのか? この今日という日に、すべてがかかっているんだ。今日、人々の前で、ハイン・ディークマンはやる気だぞってことを示すんだ。」

「確かにおれは彼のところに行くつもりだ。自分が彼の友達であることを告げるつもりだ。彼もおれのことが好きはずだし、好きになってくれないと困る。」彼はこの最後の言葉を、ほとんど警告するように言った。ジョニーは彼を引きとめようとしていたが、この言葉を聞くと急に彼から離れ、そのまま彼を行かせた。あの男がハインにたいして親切でなければ、すべてがうまく運ぶのだが。どうしたらこんな嫌な大酒飲みのことが好きになれるんだろう? 彼がハインに好意を示さなければハインが激怒するに違いないということは、ジョニーにはよく分かっていた。そのとき、ハインはどんな力を発揮するのだろうか。いずれにせよ、大激戦が展開され、ハインが大勝利を収めることは間違いない。

音楽が立て続けに鳴り響き、沈黙した。白いセーラー服

を着た小さな男の子が、野外舞台で照明を浴びて途方に暮れたように立っていた。彼は、舞台の脇で腕組みしながら待っている父親の視線に操られていた。観客は急に静かになった。アッディは、薄い金髪をなびかせて短く最敬礼した。

彼は、かん高い声で暗記したことをしゃべり出した。「ご来場の皆様、父と私はこれからいくつかの曲芸をご覧に入れます。その節は、どうかお静かに願います。これらの曲芸は、私には危険です。皆様が騒ぎされ、叫ばれますと、私が目を覚まし、事情によっては怪我をすることにもなりかねません。どうか途中で拍手なさないで下さい。父が「終わりです」と叫んだあとで、拍手をお願いいたします。もちろん…」彼は、わざと悪戯っぽくきゃしゃな指を立てて言った。「皆様の喝采は大歓迎です。」彼は、もう一度お辞儀をして引っ込んだ。観客たちは彼に同意するように沈黙し、ただにやにやしていた。

「可愛らしい男の子ね」と、ベルタは言った。

アントンがつぶやいた。「幼児虐待だ。こんなに夜遅く。顔に血の気がないじゃないか。」

「ひどい世の中だ」と、オスカルは決めつけた。彼らの隣の男性は、我を忘れて、遠くの人々やテーブルに届かんばかりにもうもうと煙草をふかせていた。

木陰に黒人が立っていた。彼は幹に寄りかかり、絶えずベルタの方を見やっていた。彼は、青いズボンと黄色いシャツを身につけ、腰にはベルトをはめ、ワイシャツのカラーを広く折り返していた。彼がにやにや笑ったので、ベルタはすぐ目をそらせた。

催眠術師は長い間じっとアッディを見つめていた。アッディは目を閉じ、眠ったままでふらふらしながらそこに立っていた。父親は彼の脚をつかんで、固い板のようになったその体をぐるぐる振り回し、逆さまにした。そして、「じっとしているんだ」と命令した。催眠術師はどしりと舞台上に立っていた。健康で活力に満ちた彼の赤ら顔は輝いていた。父親の視線に呪縛されて、アッディは、腕をびったり体につけ、脚を揃えたまま逆立ちしていた。それから父親は彼の脚をふたたび下にした。誰かが拍手しようとしたとき、「シッ、シッ」と、彼は口に指を当てて注意した。彼は、二つの椅子を近寄せて並べ、小さな固い板のようになったアッディをその上にのせた。彼の首は一方の椅子の肘掛けの上に、彼の脚はもう一方の椅子の肘掛けの上にあったが、体は折れ曲がってはいない。父親がふたたび息子を立たせ、椅子を取り去って背後に合図した。二人の少年が無言で出てきて、綱のついた二本のポールを立てた。父親が「綱に向かって走るんだ」と命令すると、アッディは、腕を体にびったりつけたまま、ごごちない足取りでぐんぐんポールの方に進んでいき、小さな綱梯子をよじ

登り、目を閉じ、体を硬直させたまま綱の上を進み、また戻ってきて梯子を降り、身じろぎもせず父親の前に立った。父親は自慢げに腕を動かして、勝ち誇ったように観客を見つめた。観客は拍手しようとして、またしても催眠術師の「シッ、シッ」という警告に妨げられた。

「きれいな皮膚に、吹き出物とは残念だ」と、ハイン・ディークマンは言った。彼は少しよろめいているが、脚を広げて立っていた。緑色の縞の入ったバスローブのポケットに両手を突っ込んで、彼はぼんやりアルバロスの方を見ていた。深青色のパンツをはいただけの裸のアルバロスは、鏡の前に立っていた。彼は腕を背中に回してすべすべした褐色の皮膚にできた赤い大きな吹き出物に手を伸ばそうとした。

アルバロスは振り向いた。「そこにいるのはディークマンさん？ 誰か別の人が来たのかと思ったよ。」彼は、ディークマンの方に親しげに歩み寄ると、はじめは驚いたように、そして次第に落ち着きを取り戻して彼を見つめた。彼の固く締まった口が少しだけ開き、微笑みをもらった。青褐色の彼の頬はひげを剃ってすべすべしており、白い歯がこぼれていた。

ハイン・ディークマンの視線は、アルバロスの体のあちこちに向けられた。筋肉のたくましい若々しくほっそりした四肢、褐色の皮膚、緊張してピクピク動く筋肉のふくらみ。それは、幅広い肩や前の方に反った毛深い胸から、へそや尻の方に走っていた。アルバロスはしばらく彼を見つめていたが、ふいと脇を向いた。彼は、もう微笑んではおらず、彼の顔は硬くなっていた。

「僕がいきなりあらわれたんで、びっくりしたんだろう？」ハインは下の方から言った。「どうして僕がここにやって来たのか、よく分からんだろうね。僕は、あんたのことがとてつもなく気に入ったんだよ。こいつは驚いた、いい男じゃないか、そう思ったんだ。あんたさえよければ、よい友達になれそうだよ。あんたと闘うことになってるなんて、僕は考えたくないんだ。そんなことは絶対にしたくない。」

アルバロスは言った。「どうも僕には理解できない。闘いは闘いで、それは僕たちとは、僕たち個人とは無関係だろう。」

「とにかく僕は、あんたとは闘いたくないんだ。友達と闘って倒したくないんだ。それは気の毒すぎる。」

「あんたが僕を倒せるかどうか、とにかく一度見てみようじゃないか。それに、友達といっても、僕たちはお互いのことをほとんど知らないじゃないか。」

「もちろん友達さ」と、ハイン・ディークマンは懇願するように叫んだ。「アルバロス、君は親切ないい男だ、僕たち

は友達なんだよ！」ハインは、ほとんど泣き出しそうだった。彼の吐く息はブランデーの匂いがした。

「おいおい、そんな真似はやめてくれ」と、アルバロスは割り切れない気持ちで言い、少し頭を振った。「どうも分からんなあ。」「分かってくれないかな、アルバロス」と、ハイン・ディークマンは嘆いた。「そんなとき、僕は君のようなたくましいいい男に出会ったんだ…。」

「その指を離してくれ。」アルバロスはそう言って、あとずさりした。「一体どういうつもりなんだ？ あとで、あんたは思う存分僕の体にさわれるじゃないか。そのときは、僕もそれについてとやかく言わない。だが、今はだめだ。残念ながらその手には乗らないよ。僕を口説き落とそうとでも言うのかい。僕はあんたが考えてるような男じゃないよ。」

「僕はただ君に僕の友情を示そうと思っただけなんだよ、アルバロス」と、気後れしたハイン・ディークマンは、愛情と非難を込めて言った。「僕は君に別に何も求めない。ただ、君に僕の好意を示したいだけだ。僕達は友達なんだから、今日はあまり激しく格闘しないでおこう、そういう申し合わせをしておこうと君に提案したかったのさ。」

「申し合わせることなんか何もない。僕たちは真剣勝負をする、それで十分だ。いかさまはご法度だ。あんた、正気に戻ってくれ。それとも、物笑いの種になりたいのか。どうしてこの僕に、そんな恥ずべきことを提案しようという気になったんだい。不安だからじゃないのかい？」

アルバロスは、ハイン・ディークマンを冷たくさげすむように見つめ、また鏡の方を向いた。この話はこれでけりがついたんだ。畜生め。とっとと失せろ。もうこりごりだ。彼はディークマンに背を向け、上半身をほっそりした腰のところまでねじって、肩越しに吹き出物に手をのぼした。吹き出物を探り当てると、彼は二本の指でそれを押した。すると、吹き出物の口が開き、膿と血が少し出た。部屋の中は静かだった。外部からは音楽も聞こえてはこなかった。アッディが今まさに、物音も立てずに押し黙った観客たちの前で、催眠術の芸を披露しているのだ。天井のむき出しの電球から、殺風景な薄緑色の壁や椅子、机のうえに照明が降りそそぎ、アルバロスの四肢を鋭く浮かび上がらせていた。また、照明の一部は彼の黒々した頭髪に反射していた。窓の前にはぼんやり照らされた外壁があって、そのうえに夜が重く押しつぶさっていた。

ディークマンはうめくように自分の怒りをぶちまけた。「自分が礼儀知らずだってことが分かっているのか？ 卑劣で恩知らずな礼儀知らずだってことが。僕はここにやって来て、あんたに自分の友情を示した。年上のハイン・ディークマンが、このめかし屋、この青二才の生意気な若造に友情を示したんだ。それなのに…」

「美しい友情か。ありがたいことだ。あんたは僕に言い寄ったんだよ。ふしだらな。」アルバロスは肩越しに冷たくこう言い捨てると、また吹き出物をいじくり、布切れで傷口をぬぐった。

「この感じのいい若者をいたわってやろう、彼に何もしないでおこう、大目に見てやろうと思ったのに…」ハイン・ディークマンはうめいた。

「本心を言ったらどうなんだ。ディークマンさん。あんたは思い違いをしている。僕にはあんたの保護は必要ないんだ。でも、あんたには、友情の美名のもとにちっほけないかさまをする必要があるんだろうよ。まあいいさ、誰でもいつかは年をとるんだ。」

「何だと」と、ハイン・ディークマンは叫んだ。彼の太い首、大きな頭に血が上った。「あんたに不安を抱いているので、僕がここに出向いてきたんだと思込んでいるのか？」

「ご想像にまかせるよ。いずれにしても、あんたの行為が道義にもとっていることだけは確かだ。話はこれで終わりだ。もう、やめようじゃないか。あんたも今が潮時だよ。」

「ひどい、ひどすぎる。」ハイン・ディークマンはこう叫ぶと、地団太を踏んでこぶしを振り上げた。「糞味噌もいいところだ。よし、それなら、このハイン・ディークマンがどんな男か、あんたに分からせてやろうじゃないか。それがあんたにはまだよく分かっていないようだからな。僕がまともに勝負したら、あんたの立派な骨も曲がってぼきりと折れてしまうぜ。」

そのとき、ドアが少し開いて、ダンサーのニータが上半身を突き出した。鱗のついた彼女の衣装は、光の中でキラキラ輝いていた。

「ここで何があったの？ ちょっとした意見の相違？ 二人とも、仲直りしてよ。お互いに仲良くして。ディークマンさん、そんな大声で叫ばないで、このアストリアの隅々まで響きわたってるわよ。入っていいんでしょう？ ディークマンさん、一体どうしたの？ そんなにじろじろ私を見つめないでよ。不安になるじゃないの！」アルバロスは、布切れを手から離してディークマンの方に振り向いた。「それが一番だ。出てってくれ。」

「よし、それじゃ出ていこう。僕を放り出す必要はないよ。あんたのかわいい小鳩と二人きりにさせてやろう。互いになっぷりくちばしをこすり合わせて、ちちくり合うがいいさ。だが、一旦試合が始まったら、笑いごとじゃなくなるぞ。そのとき、このハイン・ディークマンがもう年老いて疲れ果てているかどうか、きっと分かるだろう。」ハインはくると背を向けると、憤激してぶつくさ言いながら立ち去った。ドアのそとにダンサーのフレッドが立っていた。青白い額の上にシルクハットを斜めにかぶった彼は、首をかしげて聞き耳を立てていたのだ。彼は、慇懃に近づ

くと、微笑しながらディークマンを凝視した。「あの思い上がったにやけ男をやっつけて下さい。」彼は親しみを込め小声でささやいた。

「まだこのハイン・ディークマンのホールドを知らないやつがいるなんて驚きだよ。」ハインはこう言うと、廊下を自分の楽屋の方にヨロヨロ歩いていった。

ニータはくすくす笑った。

「あの豚野郎」アルバロスはこう言って、バスローブを取るために掛けくぎの方に歩いていった。

「ここにいてよ」と、ニータは頼んだ。

「一体何がして欲しいんだ？」と、アルバロスは聞いた。「蠅のようにつきまとうなよ。うっとうしい。」

「私のことが面白くないの？」と、ニータは尋ねた。

「ああ」と、アルバロスは答えた。

「あなたのそばにいさせて」と、ニータはささやいた。

「もう一度あなたの体に触れさせて。」

「一体何のつもりなんだ。それより、パフを取って、背中への吹き出物のところを拭いてくれよ。」ニータは言われた通りにした。彼女は、自分の頭を彼の冷たい背中に当てた。「あのディークマンがあなたに何も仕出かさなかったとしても、私は不安なの。あの男は腹を立てれば立てるほど強くなるのよ。分かっているの。」

「ああ」と、アルバロスは言って、彼女を振り切った。

催眠術師は腕を上げ、意味ありげにその濃い眉をつりあげた。「さて、みなさま」と、彼は押し黙った観客たちに向かって呼びかけた。彼の赤い頬は輝いていた。「ただいまから、特別の出し物が始まります。今晚限りの、特別のナンバーです。「歌うナイチンゲール」。みなさまはきっと驚かれることですが、どうか静粛と注目をお願いいたします。」

彼はアッディの方を向いた。「アッディ、私のナイチンゲール、木に向かって進むんだ。」アッディの体に衝撃が走り、彼はまたもや、目を閉じたまま、まどろんだ状態で、ぎごちない足取りで歩き始めた。彼は舞台から下りて、父の指示した大きなブナの木に近づいていった。その木は舞台にほど近く、少し脇の方に植わっていたが、観客たちにもよく見えた。

「上へ、上へ、上へ」と、父は歌うような調子で叫んだ。

アッディは、木の根元に近づくと、さっさと、機械的に、考えられないほどの早さでその幹によじ登った。彼はしがみつくと必要すらないように見えた。まず最初の枝に、次いで第二の枝に、さらに高く、葉が茂った木のこずえに移り、とうとう一番高い二股のところまで到達して、そこに身じろぎもせず座った。

観客たちは頭上を見上げ、幾人かはもっとよく見ようと

して立ち上がった。あちこちで、人々は度を失って愉快そうな笑い声を立てた。こいつはすごい！ あの子はまるで栗鼠のように木によじ登っていくぞ。これは一体どういうことなんだ？ 観客たちは緊張して、静かに座っている子供を見つめた。葉の間を通して、子供の白い服は、青い空をバックに映えて見えた。催眠術師は手を口にメガホンのように当てて叫んだ。「さあ、アッディ、私のナイチンゲール、歌うんだ。」

一瞬、あたりが静かになり、それから子供の細い声が歌い始めた。最初のうちは、揺らめく小さな炎のように不安定で不確かだったが、次第に明確さを増し、明るく透き通った銀色の純粋な旋律が紡ぎ出され、客席と夜空に響きわたった。観客たちは押し黙り、顔を上に向けながらその調べに耳を傾けた。彼らは、少しくぼんだ灰色がかかった銀の満月が雲間を動き、照らし出されて急に輝きを増した雲が重苦しく生暖かい風に乗って流れていくのを見た。彼らは、夜の大気の生暖かい流れ、歌声の爽やかさ、この瞬間の静寂を感じていた。粗暴な男たちは、頭を振りながら「くだらねえ」とつぶやいていたが、それでも頭上を見上げ、耳を傾けていた。ベルタも顔を上に向け、眠ったように座り込んでいた。この瞬間、彼女は黒人のことをすっかり忘れていた。その黒人も、目を輝かせ口を半開きにして、こずえを見つめていた。アントーンとオスカルも聞き耳を立て、税関吏は頬杖をついて物思いにふけりながらテーブルの甲板を見つめていた。催眠術師は、舞台上で勝ち誇ったように微笑み、歌声に合わせて手を指揮するように動かしていた。人々は、眠っているときのように軽やかに、安らかに呼吸し、四肢の緊張を解いていた。彼らは優しく体に触れるように夜が近づいてくるのを感じていた。夜は、そのもっとも深い安らぎと静寂、もっとも暗い時を目指してゆっくり広がっていった。そして重苦しい微風が起こり、木々をやわらかくかき乱し、アッディの歌声を庭や家々の向こうに運び去った。たいていの通りはもうひっそりしており、船はその重い船体を港にじっと横たえ、帆は折り畳まれて、内港の水はどろりとしたタールのかたまりのように淀んでいた。アデライーデ号もそこに静かに碇泊していた。灯りはほんの数か所しかついておらず、機関が断続的にうつろな響きを立てていた。マルテンス船長は、船室に腰を落ち着けて息を弾ませながら書き物をしており、給仕は私物を一まとめにして船から離れようとしていた。川は、町の橋の下をさらさら流れ、橋脚がその流れに抗していた。その流れに乗ってしばらくすればアデライーデ号もまた進んでいくだろう。川岸の高い税関の倉庫の上がり口のところに、漁船が数隻横づけされ、釣り師たちがじっと水面に釣り糸を垂れていた。他の漁師たちは、月に輝く潮から網を引き上げようとしていた。脂っばい微

光を放つ魚体が頭をもたげ、水中に跳ね戻ろうとした。濠の白鳥たちは、頭を羽毛に突っ込んだまま小屋のかたわらでまどろんでいた。湿地の水からは腐敗臭が立ち上っていた。ひきがえるが這いのぼり、長く引っ張ったうなり声を喉から絞り出した。彼らは、岸辺の木の根の間をチューチュー鳴きながら走り回るねずみを水晶のような目でじっと見つめていた。いたちもかすかにうなりながら走り出て、水中に飛び込み、うなぎに噛みついた。葉がびっしり茂った土手の木々は息をこらしていた。ベンチは空で、製粉工場の水車がこうもりの翼とともども丘にそびえ立っていた。管理人は床についており、彼の朽ちた小舟は岸で夢を見ていた。時折月の光が差し込む暗い部屋の中の剥製の鳥の下には、管理人の先のとがった麦藁帽子がかけてあり、ソファの上にかかっている彼の亡くなった妻の写真の下のテーブルの上には、新聞と眼鏡のケースが積み重ねて置かれていた。「航海」館の船長の未亡人たちは、小さくしわが寄った色鮮やかな布地の羽毛ふとんに潜り込んでいた。彼女たちは、窓を開けっ放しにしていたので、枕元には中庭の小さな噴水の音やオウムの金切り声の寝言が押し寄せていた。

アッディはまだ歌っていた。彼は青白い顔を反らせ、腕をだらりと垂らしたまま、枝の上じっと座っていた。彼は、自分の小さな体の闇の中から夜の闇の中に向かって歌っていた。明るく澄んだ調べが流れていった。彼の歌声は、こずえを越え、アストリア館の庭を越えて流れていった。ここからそれほど遠くないところで、庭や家、通りをいくつか挟んだだけのところで、ベルク氏がフルートを吹いていた。彼は相変らず窓際に立っていた。窓は開け放たれていた。ベルク氏の青白い骨張った指がフルートの穴の上を上下した。彼は首を少しかしげ、彼の穏やかな灰色の目は、調べを追っていた。規則正しい演奏で、ゆるやかに高まり、またゆるやかに静まって、安らぎに満ち、喜ばしげでも悲しげでもなかったが、いつも少し訴えかけるところがあった。それは澄んだ、はっきりした、鋭い音だった。それは夜の中に拡散し、静寂な大気の中に消え、溶けていった。

相変らずあずまやに腰を下ろしていたヘニッケ氏と税関吏は、この演奏を心地よく感じていた。彼らは、石油ランプがあたたかな光を放つテーブルから、蚊の群がるこの気の減入るようなかすかな光から時折目をそらせて、高みの平穩そのものを吸い込んだ。彼らは今、切手を交換しようとしていた。彼らの前には、すでに全ページが珍奇な切手で埋めつくされたヘニッケ氏の大きな切手アルバムが置かれていた。ヘニッケ氏は、税関吏が持参した新しいコレクションを眺めていた。ルーベで、彼は繊細で色鮮やかな切手を鑑賞していた。彼がすでに所有しているのもあれば、

まだ持っていないものもあった。キューバ、マダガスカル、セイロン、アフガニスタンといった言葉が、重苦しい夢のように夜の中にしたたり落ちた。

ベルク氏は、自分が死の家の中で演奏していることを知っていたのだろうか？ ヤコービ夫人はそのことを彼には一言も言わなかった。取り乱したマーラー夫人が階段の弱々しい灯火に照らされて住居に通じるドアの前に立ったとき、彼女はもう、そんなことを考えもしなかった。苦境にあるマーラー夫人に手を貸すつもりで、彼女は急いで階下に向けおりた。ベルク氏はそれを知らなかったわけだが、知ったとしても、彼はたいして驚かなかったに違いない。彼は、おそらく演奏を中断しはしなかつただろう。彼は、死と親しんでおり、死を理解していた。彼の演奏もまた、死について穏やかに物語る術を心得ていた。彼のフルートの節度ある調べのもとで、マーラー氏は安らかに寝入っていた。布団の上で腕を硬直させて、彼は安らかな寝息を立てながら静かにベッドに横たわっていた。開け放たれた窓を通して流れ込んでくる暖かく香ばしい庭の空気を、彼は何度も吸い込んだ。その空気が幾晩も彼のもとを訪れ、彼の体を通して流れたのち、彼は呼吸を止めた。彼の息はだんだんかすかになり、口は開いたままで、彼の顔色はナイトテーブルのランプの光の中で色褪せていった。二人の婦人は、体を硬直させ度を失ってベッドのかたわらに立ちつくしていた。彼女たちは盟友のように互いに抱き合い、恐ろしい死の接近を見守っていた。だが、彼女たちの表情は次第に穏やかになり、死が軽やかにこの男を訪れたことや、死が実際には安らかな永眠、無言の旅立ち以外のなにものでもないことを悟ったとき、彼女たちの不安はもはや消え失せた。

「まったくやり切れないって感じじゃないわね」と、ヤコービ夫人は言った。「私はもちろん…」

「死の訪れってというのはこんなに静かなものなのね」と、

マーラー夫人も言った。しかし、夫の血の気のない腕や恐ろしい不動の顔を見た彼女は、死者の上に身を投げかけた。彼は完全に消え失せていた。そこに横たわっているのは、彼とは似ても似つかない蠟人形であり、抜け殻だった。彼は消え去って、二度と戻っては来ないのだ。

ヤコービ夫人は、腕を組んで成りゆきを見守りながら脇に立っていた。マーラー夫人の振舞いは至極当然だと彼女は思った。夫が亡くなったというのに、彼女は何て馬鹿な真似をしているのだろう。だが、こうやって人はうまく切り抜けていくものだ。自分のときもそうだったし、マーラー夫人もきっとそうなるに違いない。人がこのことを自分に言って聞かせることができないのは滑稽だが、そううまく事が運ぶものではなからう。

彼女は、マーラー夫人の上に身をかがめて、その肩を軽くたたいた。「お気の毒に…いい人だったのにね…思う存分お泣きなさい、そうすればいくらか気が晴れるでしょう。」その後で、マーラー夫人が一層激しくすすり泣いたとき、彼女は引込んだ。辛抱が肝心だ。ほっておいて、気のすむまで泣かせておくことだ。それ以外にどう仕様もない。手芸でも持ってきて、しばらく彼女のそばに腰を下ろしてあげよう。もちろん、この死人のそばじゃなく、居間のランプのそばで。でも、あの手芸、もう出来上がったんだっけ？ いや、確かまだ完成してないはずだ。エルゼの誕生日は明後日なんだから。ためらいながら、ヤコービ夫人は、脇の戸棚の上に置いてあるリングがうずたかく盛られた鉢を見た。リングは、すえたようなにおいが強く、すでに腐りかけていた。そのにおいが庭のにおいや始まった死のにおいと混ざり合っていた。天井や窓を通して、ベルク氏の不吉なフルートの調べが聞こえていた。だが、マーラー氏の硬直した体の上を穏やかに明るく流れているこの調べは、本当に不快で耳障りな音なのだろうか？ これこそまさしく死の音楽ではないのだろうか？